

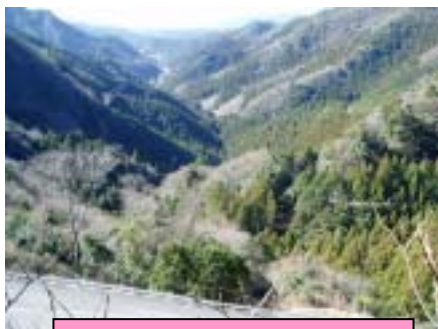
## 狸 6 砂を振り掛ける = = = 猪・鹿・狸より

狸は人を嚇す時に、尻尾で人の頭を撫ぜたり、後から砂を振りかけると言うた。鳳来寺道中の、追分の出離れの分垂橋の袂を通ると、狸が尻尾で頭を撫ぜるともっぱら言うた。それがあつたいは事実であつたかこの頃になつて思うことがある。橋の袂に赤松が五、六本立つていて、中に一本道の上へ幹が差し出したのがあつた。もう三〇年も前であるが、村の某の狩人が、暮方通りかかると、犬が上を向いてしきりに吠え立てたそうである。もう暮方ではあるし、そのまま通り過ぎようとしたが、あまり吠え方が烈しいので、上を仰ぐと、その横態になつた幹の上に、狸が上つていたそうである。すぐ撃ち殺して提げて来たが、思いがけぬことだつたと語つていた。



分垂橋

八名郡大野から遠江へ抜ける途中の須山の四十四曲りの坂へは、狸が出て通る人に砂を振りかけると言うた。それで夜分など滅多に通るものもなかつたそうである。ある時大野のものが、須山から日を暮して来て四十四曲りにかかると、後から少しずつ砂を振りかけるものがある。初めはさほど気にもせなんだが、だんだん気味悪くなつて、足を速めるとなお盛んにかける。果てはおそろしくなつて、どんどん駈け出すと、駈ければ駈けるほどますます盛んになる。夢中で坂を駈け崩れて来て、途中の人家へ飛び込んだそうであるが、後になつて考えると、自分の穿いていた草履が跳ねる砂だつたと、果ては大笑いしたそうである。しかしこんな話は別として、四十四曲りのある個所では、現に小石混じりの砂を振りかけられたものも、大野町にあつたと言う。また某の修験者は、そこで狸に化かされて、一晚中山をうろついて、須山の村で借りた提灯は骨ばかりになり、自分の着物もほとんど滅茶滅茶に引き裂いて、体中を茨搔にして、朝になつて歸つたことがあつたと言う。修験者を化かすほどの狸なら、砂をかけるぐらいは、朝飯前の仕事だつたかも知れぬのである。



四十四曲り(巢山 細川)

分垂橋も四十四曲りも、如何にも狸が出そうな処です。細川から巢山に登る坂は、改良された今でも三〇ヶ所以上のカーブがあります。